

群 教 セ	G01 - 04
	令5.284集
	国語 - 高

高校国語において主体的に評論文の読解力を向上させていくことのできる生徒の育成

——教えない授業における学習課題の工夫を通して——

特別研修員 菊地 将史

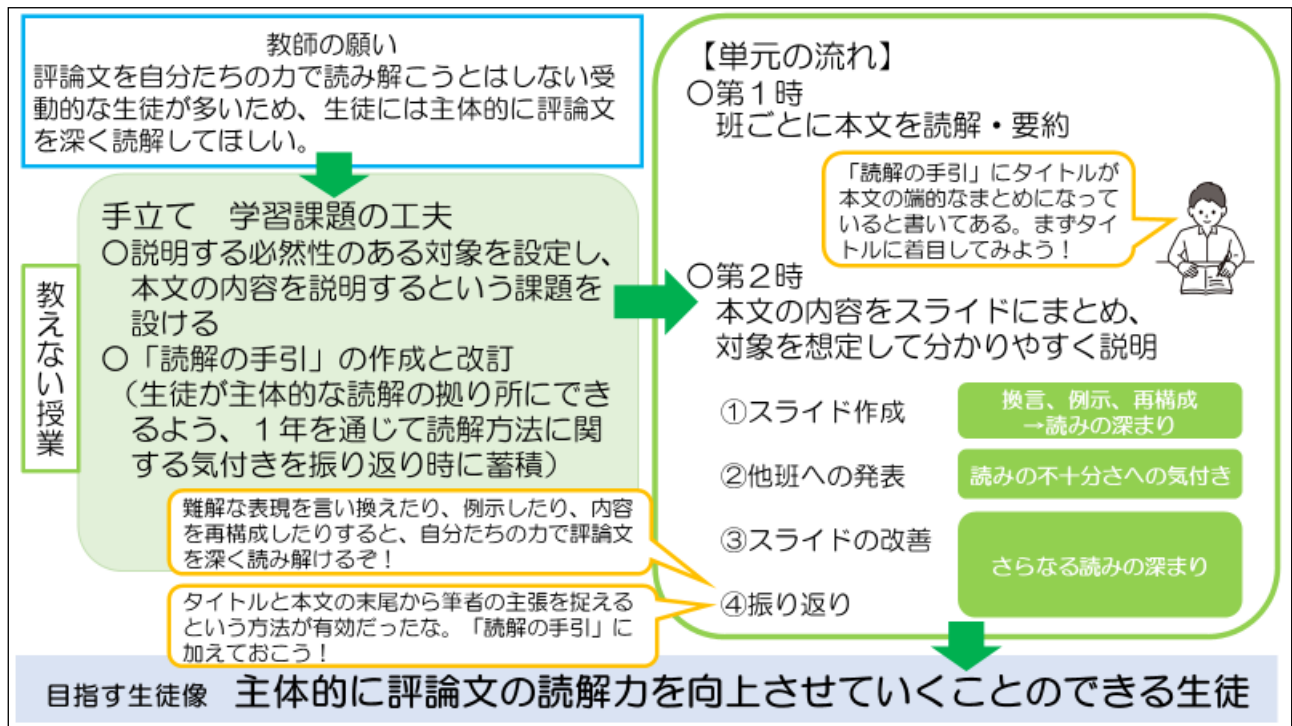
I 研究テーマ設定の理由

平成30年に告示された高等学校学習指導要領解説国語編においては、「生産年齢人口の減少，グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により，社会構造や雇用環境は大きく，また急速に変化しており，予測が困難な時代となっている」、「情報化やグローバル化が進展する社会においては，多様な事象が複雑さを増し，変化の先行きを見通すことが一層難しくなっている」といった指摘がなされている。予測の困難な時代や社会の変化に主体的に関わり，新たな価値を生み出しながら，よりよい未来や社会を創っていくためには，生涯にわたって能動的に学び続ける力が不可欠である。このような力を育むためには，教師が生徒に教える従来の指導だけでは不十分だと考えられる。生徒が自ら「見方・考え方」を働かせて思考したり，他者と対話を重ねたりしながら，自分たちの力で学びを深めていくことのできるような新しい指導が求められるだろう。こうした指導を積み重ねていくことで，生徒たちは能動的に学び続ける力を身に付け，教師による主体性の喚起すらも必要としない自立した学び手になり得ると考える。

そこで，今回の研究では高等学校の「現代の国語」において，教師から教えられることなく主体的に評論文の読解力を向上させていくことのできる生徒の育成を目指すこととした。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

生徒が主体的に評論文の読解力を向上させ、自分たちの力で本文を深く読み解いていけるように、以下のような手立てを通して授業改善を図った。

手立て 学習課題の工夫

教師に頼らず、生徒自身による主体的な読解の実現を目指す。教師が教えなくても生徒が自分たちの力で評論文の読解力を向上させ、教材を深く読み解いていけるようにするため、「本文を読んだことのない説明対象を想定し、本文の内容を説明する」という学習課題を設定する。説明対象の決定に当たっては、教材の内容と関わりがあり必然性の感じられるような存在となるように工夫する。説明する必然性のある対象の例としては、同一教材を学習する予定の他校の生徒等が挙げられる。こうした説明対象を設定し、対象と教材内容との関連性を明示することで、生徒が学習課題に現実性や必要性を感じて能動的に取り組むようになると考えられる。また、本文を読んだことのない想定の手前に向けて内容を説明しようとする中で、生徒が自分たちの力で本文を深く読み解くことができるかと推考する。これは、生徒が説明対象にとっての分かりやすさを追求し、本文の抽象的・比喩的な表現を平易に言い換えて説明したり、身近な具体例を挙げたり、内容を整理・再構成したりすることにより、読みが深まると考えられるためである。

なお、生徒による主体的な読解においては行き詰まった際に支えとなるものが必要になると考えられる。そこで、上記の課題に加えて「『読解の手引』を作成し、1年を通じて改訂する」という学習課題も設定した。「読解の手引」は、生徒が主体的な読解の拠り所になれるよう、評論文の読解方法における気付きを振り返り時に蓄積したものである。

【単元の流れ】

- 第1時 班で本文の読解と要約を行う。
- 第2時 班ごとに本文の内容をスライドにまとめ、本文を読んだことのない対象を想定して分かりやすく説明する。
 - ①スライドの作成→②他班に向けた発表→③スライドの改善→④振り返り

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 必然性のある対象を想定し、本文の内容を説明するという学習課題を設定したことで、授業の中で教師に頼らなくとも、生徒が主体的に評論文の読解力を向上させることができた。
- 説明対象と教材の内容との関わりを明示したことで、生徒にとっては学習課題が必要性のあるものだと感じられた。結果として、生徒の学習意欲や主体性を喚起することができ、終始能動的に本文を読み解く姿が見受けられた。また、生徒は本文の難解な表現を平易に言い換えて説明したり、対象に即した具体例を挙げたり、本文を整理・再構成したりすることを通して、自分たちの力で読みを深められた。さらに、実際に他班に向けた発表を行う中で、生徒は自身の読みの甘さに対する気付きを得ることもできた。その結果、生徒の中に本文を更に深く読み込もうとする意識が生まれた。
- 生徒は「読解の手引」の作成と改訂を通して、評論文の効果的な読み方を自分たちで考え、整理することができた。また、「読解の手引」は生徒が主体的な読解を進める上での拠り所の一つとなり得た。

2 課題

- 今後は、更に主体的な評論文の読解力の向上を実現するために、生徒が自らの興味や関心に基づきながら自分たちで学習課題を設定する機会を設けたい。

実践例

- 1 単元名 「要旨を把握して発表し合おう」
 教材名 「身体、この遠きもの」筑摩書房（第1学年・2学期）

2 本単元について

思考する主体としての「私」の存在を『方法序説』の中で措定したデカルトの「我思う、故に我在り（Je pense, donc je suis）」という言葉が端緒となり、近代においては長らく「心身二元論（物心二元論）」が支配的な位置を占めてきた。しかし、20世紀に入ると精神と身体を対比して身体を劣位に置くという従来の在り方が反省され、身体とその価値について再考する動きが生まれてきた。今回取り上げる教材も、こうした動きの中に位置付けることができる。

本教材は哲学者の鷲田清一が「身体」について論じた評論文である。他の物体との比較の中で、身体の異質さを浮き彫りにしている。私たちは自分の身体の一部しか直に見たり触ったりすることができない。極めて不完全にしか知覚できない身体は、単なる物質体ではなく「想像されるひとつの〈像〉」であると考えられる。身体がとりとめのないイメージであるがゆえに、「私」という存在と身体との関係性は様々に変化し得る複雑なものとなる。他人が「私」を他ならぬ「私」として認識してくれる身体は、「私」にとって不随意で遠い存在であるのだ。

本文は哲学的な内容となっており、随所に比喩的、抽象的で難解な表現が見られる。しかし、種々の具体例が効果的に用いられているため、高校1年生が自分たちの力で文章を読み解き、読み取った内容を的確にまとめるのに好適な教材であると考えられる。また、「身体」という身近なものをテーマとしているため、生徒が「本文を読んだことのない相手を想定し、内容を分かりやすく説明する」という学習課題に取り組む中で、日常や個々の経験に即した具体例を挙げながら主体的に読みを深めていくことができるであろう。なお、今回は身体に関する評論文であることから、身体的な変化が生じて自己の身体への関心が高まる「小学校5年生」を説明対象に設定した。

以上のような考えから、本単元（題材）では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	(1) 言葉には、認識や思考を支える働きがあることを理解することができる。 <div style="text-align: right;">【知識及び技能】</div> (2) 文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握することができる。 <div style="text-align: right;">【思考力、判断力、表現力等】</div> (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。 <div style="text-align: right;">【学びに向かう力、人間性等】</div>	
評価 規 準	(1) 言葉には、認識や思考を支える働きがあることを理解している。 (知識・技能) (2) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握している。 (思考・判断・表現) (3) 学習の見通しをもちながら発表資料を作成しつつ、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉えて粘り強く要旨を把握しようとするとともに、言葉の働きについての理解を深めようとしている。 (主体的に学習に取り組む態度)	
過程	時間	主な学習活動
つかむ 追究する	第1時	・班で協働しながら、本文の読解と要約作業に取り組む。
追究する まとめる	第2時	・班ごとに、本文を読んだことのない小学校5年生に伝わるような分かりやすい説明を考えてGoogleスライドにまとめ、他班の人に向けて発表し合う。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全2時間計画の第2時に当たる。本時のねらいは「評論文を自分たちで深く読み込む読解力を身に付けられるようにする」ことである。ねらいを達成するための手立ては以下のとおりである。

手立て 「『本文を読んだことのない小学校5年生』という想定の対象に、内容を分かりやすく説明する」という学習課題を設定する

今回扱う「身体、この遠きもの」は身体について論じた文章であることから、身体的な変化が生じて自己の身体への関心が高まる「小学校5年生」を説明対象とする。こうした教材と対象との関わりを明示することで、生徒が学習課題に現実性や必要性を感じられるようにする。それにより、生徒の学習意欲と主体性を喚起する。また、生徒がGoogleスライドを活用して内容を分かりやすく説明するという課題に取り組む中で、本文の抽象的・比喩的な表現を平易に言い換えたり、対象の日常に即した具体例を挙げたり、内容を整理・再構成したりしながら、自分たちの力で読みを深めていくことを企図する。

4 授業の実際

(1) 前時

第1時には、班で協働しながら本文の読解と要約に取り組んだ。読解に行き詰まった際には、これまで改訂を続けてきた「読解の手引」を活用したり、他班の生徒に援助を求めたりする様子が見受けられた。

(2) 導入

ICTを活用して学習課題とめあて、具体的な流れに加えて、説明対象とその設定理由の共有を行った。対象と設定理由を提示した際には、生徒の興味・関心の高まりが見て取れた(図1)。

(3) 展開

生徒は35分かけて班ごとに読み解いた本文の内容をGoogleスライドにまとめた。班員と協働して何度も本文に立ち返り、能動的にスライドを作成する姿が見られた。以下に示す図2は抽出生徒Aの要約と生徒Aの所属する班内の対話、班のスライドである。



図1 説明対象と設定の理由を提示した際の生徒の様子

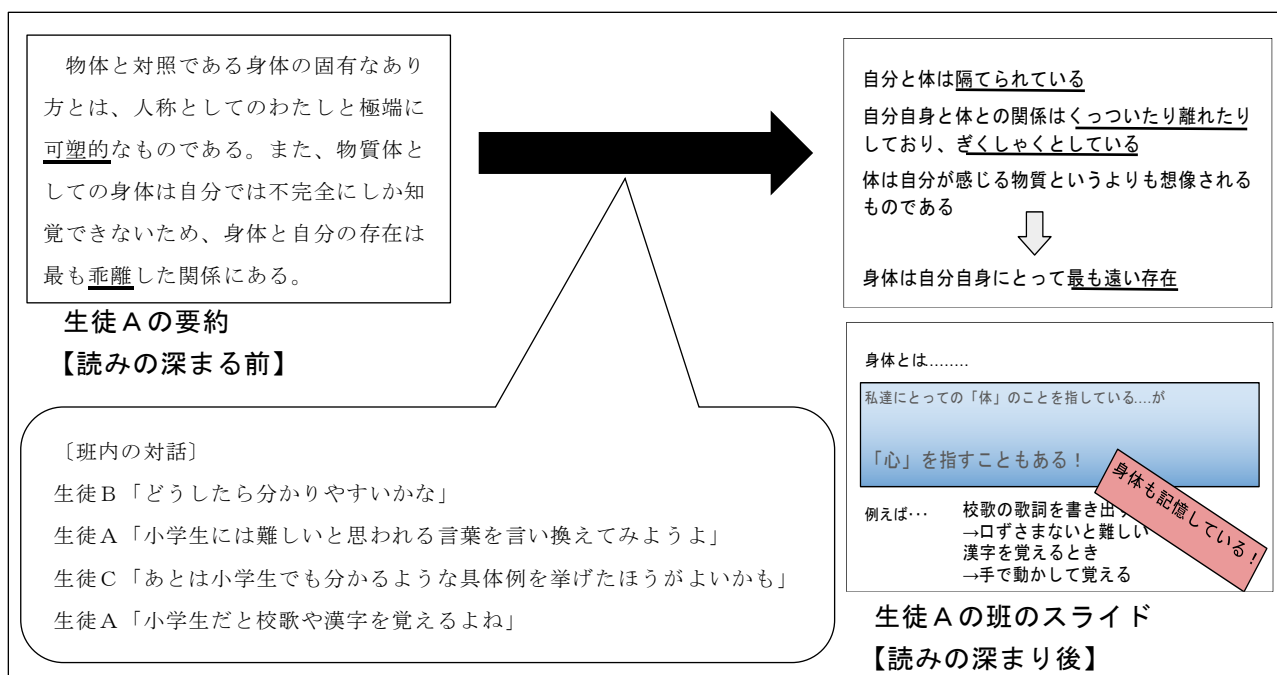


図2 抽出生徒Aの要約と生徒Aの所属する班内の対話、班のスライド(下線は筆者による)

スライドの作成後には班を再編成し、他班の人に向けて発表し合った。発表は質疑や助言等も含め、一人につき2分間で実施した。その後再び最初の班に戻り、他班の発表や助言に関する情報を共有した。発表を通して自身の読みの甘さに気付き、本文をより深く読み解こうとする生徒の姿が見受けられた。

(4) 終末

授業の最後にはGoogleフォームを活用して個人で単元の振り返りを行った。振り返りは単元目標の達成状況や説明対象の必然性の有無、学習の中での気づきを回答するものであった。以下の図3は生徒たちの振り返りの記述であり、図4は本単元を終えた時点での「読解の手引」である。

- ・ 班のメンバーとの意見交流や他の班の発表を踏まえて、様々な着眼点から評論文を読めた。
- ・ 小学5年生に説明するためには本文の流れのとおりにとどめるのではなく、実例を挙げたり、内容を噛み砕き、言い換えて表現したりすることが重要だと感じた。今後も意識したい。
- ・ 主体的に評論文を読解することで、しっかりと文章に向き合い、内容を深く理解しようとすることができた。今後も今回の授業での経験を生かしたい。

図3 生徒による振り返りの記述

～**秘**テク～

- ・ 筆者の主張は最後（たまに最初）にくる。
主張は文章の軸となるので理解をしておくことと本文の全体像を捉えやすくなる。
- ・ 対比されている内容はどこが違うのかを明確に。
明確にしておくことによって設問に答えやすくなる。
- ・ 筆者の主張や接続語・指示語などには印を付ける。
これらは文章の中で重要な役割を果たしており設問になる可能性がとても高いので、印を付けておくとよい。
- ・ 言葉が難しいから具体例をよく読んで理解する。

図4 生徒が作成した「読解の手引」（一部抜粋）

5 考察

授業の中で主体的に本文を読み解こうとする生徒たちの姿が見られた。これは導入時に「小学校5年生」という説明対象と教材の内容との関連性を提示したために、生徒が説明対象や学習課題に必然性を感じられたことによるところが大きいと考えられる。実際に、授業の最後に実施した個人の振り返りの中で、説明対象に「必然性があった」と回答した生徒は91.2%に上った（「どちらか」というと必然性があった」の26.5%を含む）。

また、各班の作成したスライドからは生徒たちの読みの深まりを見取ることができた。前述の個人の振り返りにおいて、91.2%の生徒が「自分たちの力で主体的に評論文を深く読解する」という目標を「達成できた」と回答している（「どちらか」というと達成できた」の47.1%を含む）ように、生徒自身も読みを深められたと実感していることがうかがえる。難解な本文の内容を小学校5年生にも理解できるように、抽象的・比喩的な表現を平易に言い換えたり、身近な具体例を挙げたり、内容を整理・再構成したりする中で生徒たちの読みが深まったと考えられる。このことは、「文章の読みを深めるには難しいところを言い換えて分かりやすくしないといけないと思った。構成を把握して筆者の意見をまとめられるようにしたい」や「自分の中で分かりやすい具体例をもつことで読みが深まった」といった振り返りの記述によっても裏付けられている。

今後は、更に主体的な評論文の読解力の向上を実現するために、生徒が自己の興味や関心に基づきながら自分たちで学習課題の設定を行う機会を設けるなど、工夫を重ねたい。

本報告書に掲載されている商品又はサービスなどの名称は、各社の商標又は登録商標です。

Googleスライド、Googleフォームは、Google LLCの商標又は商標登録です。

なお、本文中にはTMマーク、[®]マークは明記していません。